山のトイレを考える会
新聞・雑誌記事

2005年 7月24日（北海道新聞）

（第3種郵便物認可）　北海

モラルは放置しないで

トイレ不足 荒れる山

夏山を楽しむ愛好家が集う道内の山々で、登山者が放置したし尿による自然汚染など、「山のトイレ問題」が深刻度を増している。登山道から山頂までの山域内にトイレがあるのは、愛好家に人気の道内の山のうち一割ほど。世界遺産登録された知床をはじめ道内外で、登山愛好家や地元自治体が微生物を利用して浄化するトイレの整備や「携帯トイレ」の普及など、山の自然を守るために奮闘している。（報道本部　森貴子）

「考える会」が美瑛富士で行ったし尿回収作業＝2004年9月

愛好家、自治体 対策に奮闘

「うわあ、こりゃひどい」。道内の登山愛好家でつくる「山のトイレを考える会」（横須賀邦子代表、事務局・札幌）副代表の岩村和彦さんは、手に持ったタオルで思わず鼻を覆った。昨年九月、大雪山系美瑛富士（一、八八八㍍）山頂の避難小屋近辺で行った、し尿回収活動でのことだ。

■羅臼岳はゼロ

登山客が宿泊などに使う避難小屋はトイレがなく、周辺で用を足す人が多い。小屋を中心にわずか半径五十㍍から、紙くず百四十枚と延べ五十人分の大便を回収。岩村さんは「申し訳なさそうに隠したものもあった。範囲を広げれば、もっと集まったはず」と話す。

同会の調べによると、ガイドブックなどで紹介されている道内約百八十の山々のうち、登山口近辺にトイレがあるのは百三十カ所。登山口から山頂までの山域内にあるのは二十カ所のみだ。

知床の羅臼岳（一、六六一㍍）も年間一万人以上が入山するが、往復四時間以上かかる登山道にはトイレがない。休憩ポイント付近にし尿やペーパーが放置されている例もあり、環境省東北海道地区自然保護事務所（釧路市）は「遺産登録でこれからもっと入山者は増える。携帯トイレ普及やトイレ設置など対策を地元と協議したい」と話す。

■分解能力超す

危機的状況に、道内外で対策が進んでいる。大雪山系黒岳（一、九八四㍍）山頂付近に二〇〇三年、おがくずをかくはんして微生物を活性化させ、し尿を分解する「バイオトイレ」が道内の山では初めて常設された。

しかし昨年一年間で約一万八千人が利用。トイレの分解能力を超え「くみ取り式」とほとんど変わらない日も。利用者から「協力金」二百円を集めているが、実際に支払ったのは全体の35％程度と課題も多い。

■150トン置き去り

日本一の名山、富士山（三、七七六㍍）を訪れる登山客は七―八月で約三十万人。年間約百五十トンほどのし尿が山に置き去りにされる。

山域内約五十カ所のトイレはそれまで「垂れ流し」状態で、〇三年には環境省などが「ごみやし尿汚染を解決しなければ世界遺産登録は困難」との結論を出したほど。その後、地元の登山団体や自治体が環境改善に取り組み、九割のトイレがし尿を灰と水に分解する「燃焼方式」やバイオトイレなどの「環境配慮型」に切り替わった。

北アルプスでも、燃焼方式や微生物を利用したトイレの整備が進む。さらに〇三年、山小屋経営者や「立山黒部アルペンルート」の交通機関が連携して「山岳携帯トイレネットワーク」を設立。野外排せつを防ぐため携帯トイレの利用を呼びかけている。ただ汚物を持ち歩く抵抗感などで浸透していないのが現状だ。

関連市民団体でつくる日本トイレ協会（東京）は「登山者の意識自体は高まってきている。今後は使用済み携帯トイレの回収箱設置や衛生的なトイレの整備など、利用しやすい環境づくりが急務」と指摘している。

◇

「山のトイレを考える会」は三十日と八月六日の午前十時から、JR札幌駅南口と登山具専門店「秀岳荘」（札幌市北区）で、美瑛富士の避難小屋にトイレ設置を求める署名活動を行う。同会は「トイレ設置は最善策ではないが、汚染拡大を防ぐには必要」と呼びかけている。詳しくは同会ホームページhttp://www.yamatoilet.com/へ。

18.6.28 毎日新聞

（第3種郵便物認可）　毎日新聞

2万6768人の署名提出

環境省事務所へ要請

市民団体

富士レイ 美瑛ト

大雪山系の美瑛富士（1888㍍）の山小屋にトイレを設置しようと活動していた市民団体「山のトイレを考える会」（横須賀邦子代表）などは27日、札幌市の環境省道地方環境事務所に要請書とともに2万6768人の署名簿を提出した。青山銀三所長は「重みのある要請だ。維持管理など課題もあるが対応を考えたい」と応えた。

山小屋は約20人収容できるほか、キャンプ指定地も隣接している。縦走登山者が泊まるほか、上川管内美瑛町の白金温泉登山口からオプタテシケ山（2013㍍）を目指す登山者も立ち寄る。同会が04年9月に山小屋を中心に半径50㍍を清掃した際、大便51カ所、ティッシュペーパー類が142カ所で見つかるなど、汚れが目立っている。

要請書と署名簿は同会を中心に道内の山岳関係団体が集まった「美瑛富士避難小屋にトイレ設置を求める連絡会」として提出。道にも出した。署名は昨年7月から街頭や山岳関係者を通して集めた。日本100名山など人気の山への集中などで、山のトイレは全国で問題になっている。【去石信一】

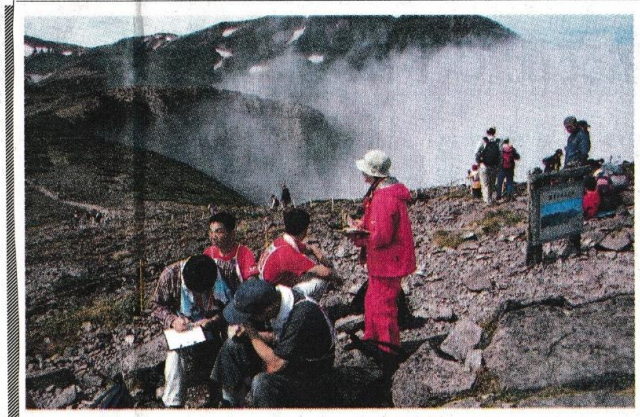
富新聞　2005.9.19 読売新聞　（第三種郵便物認可）

美瑛富士にトイレを

登山客増で汚染深刻化　山岳団体が署名活動

大雪山国立公園の美瑛富士（1888㍍）を登山客の排せつ物汚染から守ろうと、道内外の山岳関連団体が、同山の避難小屋にトイレの設置を求める署名活動を展開している。7月以降約9000人分が集まり、団体側は3万人分を目指している。署名は来年3月にも、国立公園を管理する環境相と、道知事あてに提出するという。

署名を集めているのは、「山のトイレを考える会」（横須賀邦子代表）など21団体からなる「美瑛富士避難小屋にトイレ設置を求める連絡会」。



美瑛富士のトイレ設置を求め、4日に黒岳で行われた署名活動（山のトイレを考える会提供）

同国立公園山中には、九つの避難小屋があるが、トイレがないのは美瑛富士と旭岳石室の2か所。美瑛富士を挟んだヒサゴ沼、上ホロカメットク山の両避難小屋は1～2泊の行程で、多くの登山客は美瑛富士に滞在する。だが、トイレがないため、物陰に汚物やちり紙が残されている。

登山客が増えるにつれてひどくなり、考える会で昨年9月に清掃登山を行ったところ、200近い汚物や紙を回収した。今年9月3、4日にも署名集めに訪れたが、「20～30か所で紙を回収した。昨年の清掃登山の時と状況は変わっていない」と、考える会事務局の愛甲哲也・北大大学院農学研究科助手は話す。

問題は、建設後の維持。くみ取り式だと、定期的に処理する労力と費用がかかる。土中に浸透させる方式なら保守の労力は格段に減る。携帯トイレを登山客に利用してもらえば、目隠しの小屋を建てる程度で済み、維持費もさらに少ない。「最適な方式の検討と、登山客への意識啓発は欠かせない」と愛甲さんは話す。

署名の集まり具合はまずまずで、「活動を通して、山のトイレマナーを考えるきっかけにもしてほしい」と同会では呼びかけている。考える会のホームページは「http://www.yamatoilet.com/」。問い合わせは☎011・706・2452（北大大学院農学研究科園芸緑地学講座内）へ。

こだわり調査隊

今週の指令

山での用便 マナー探れ

浮かない顔してどうしたんですか、隊長？　「山のお花畑に行ったんだけど、あちこちに丸めた紙が捨ててあって、すっかり興ざめしちゃってさ」。そりゃひどい。でもこればっかりは生理現象だし…。良い方法を探してきます。

使用後の紙は放置しない

携帯トイレ持参して

「トイレットペーパーは雨水に溶けてすぐ無くなるようなイメージがありますが、それは大きな誤解」と、市民グループ「山のトイレを考える会」の岩村和彦代表(五一)は指摘する。

山に紙を放置すると、思いのほか長い間そこに残って、他の入山者を不快にさせる。

登山愛好家でもある岩村さんは一昨年、仲間と三人で道東の羅臼岳に登った時、落ちている使用済みの紙を拾い始めたら、他のごみも合わせて八十以上も集まった。

同会の事務局長で、北大大学院農学研究院助手の愛甲哲也さん(三九)の調査によれば、登山人口に大きな変化はないものの、近年は「百名山」など有名な山にファンが集中する傾向が強いという。「そんな山では野営地から〝トイレ道〟が外側に広がっている様子が航空写真ではっきり分かるほどです」と、愛甲さん。

事前に山中のトイレの位置を調べ、できるだけそこで用を足すのが基本だ（メモ参照）。でも急に催したら、やむなく草陰に向かわざるを得ないこともある。

同会は「最低限、使用後の紙は持ち帰ろう」と呼びかける。毎年九月の第一日曜日を「山のトイレデー」と決め、道内の各登山口でパンフレットや「使用済みペーパー持ち帰り袋」を配布するなど、啓発を続けている。

イザという時のために「携帯トイレ」を持参すれば完ぺきだ。登山用品店で数百―千円前後で売られている。

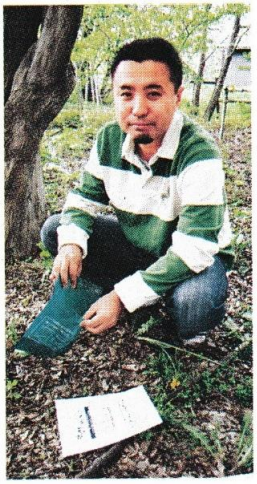
練習しておくと安心、という愛甲さんの助言に従って、自宅で「大」用を使ってみた。地べたに広げた袋は、風が吹くと飛んでしまいそうだし、「的」の大きさも心もとない。よく狙いを定めて…。

ペーパーも一緒に密封して一丁上がり。ずっしり重いこれを家まで持ち帰って、紙おむつと同様な分別処理をすれば、山を汚さずに済む。

「他人のモノまでとは言いません。自分の分だけなら責任を持てるでしょう」と岩村さん。入山者が心すべき大事なエチケットだ。

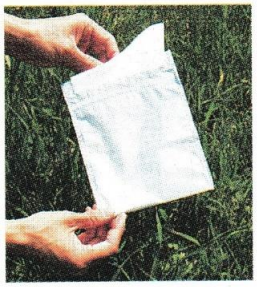
（平田剛士隊員）

草陰に残されたものを回収する「山のトイレを考える会」のメンバー（同会提供）



「使用済みの紙はこんな袋に入れて持ち帰って」と呼びかける愛甲さん

携帯トイレ（「サニタクリーン」）を広げたところ。中のシートが水分を吸収する



「小」用の携帯トイレ（「携帯ミニトイレプルプル」）

「一時期に大勢が集中すると許容範囲を超えてしまう」と岩村さんはみる

メモ

入山前にトイレの位置を確認するには、「山のトイレを考える会」が毎年更新しているパンフレット「北海道の山・登山口トイレ情報」が便利。各地のビジターセンターや登山用品店などで無料配布しているほか、同会のホームページ（http://www.yamatoilet.jp/）でも閲覧できる。問い合わせは同会事務局（☎011・706・2452、電子メールhokkaido@yamatoilet.jp）へ。

2015.3.13

北海道新聞（夕刊）

美瑛富士に携帯トイレブース

9登山団体 共同管理

今夏設置 あすフォーラム

【美瑛】国立公園に指定されている大雪山系の中でも、し尿汚染が特に深刻な美瑛富士（1888㍍）に今夏、携帯トイレ用のブースが設置され、道内の9登山団体が共同で清掃などの維持管理を始める。道内の山で同様のブースは行政や地元山岳会が管理するケースが多く、複数の登山団体が共同管理するのは珍しい。9団体は14日に札幌で管理連絡会を設立する。

美瑛富士の避難小屋（上川管内美瑛町）にはこれまでトイレがなく、周辺は登山者が放置したし尿で環境が悪化。山岳愛好家でつくる「山のトイレを考える会」（札幌）から改善を呼びかけられた環境省が6月、避難小屋周辺に携帯トイレ用のブースを設置することになった。

ブースは、登山者が携帯トイレを使う時に入るテント式の囲いで、9団体が6～9月の2週間に1回、点検や清掃を行う。費用は各団体が負担する。

同会によると、道内の主要170山のうち、登山口や山中にトイレがあるのは123山。固定トイレは維持費がかかるため、最近は維持管理が比較的容易な携帯トイレ用のブースが徐々に浸透。道内では利尻山（宗谷管内利尻、利尻富士町）など6山に設置されている。同会の愛甲哲也・北大大学院准教授は「地方だけに管理を負担させず、登山利用者の多い札幌の山岳団体が中心となって、山の自然を守っていきたい」と話す。

美瑛富士など山のトイレ事情を考えるフォーラムが14日午後3時から、かでる2・7（札幌市中央区北2西7）で開かれる。参加費500円。問い合わせは同会☎011・706・2452へ。

道内の山で設置が進む携帯トイレ用のブース＝根室管内羅臼町（山のトイレを考える会提供）

旭川（道北）版 12/1　北海道新聞　札幌版 11/29

2016年（平成28年）11月29日（火曜日）

山岳遺産に美瑛富士

札幌の保全団体に助成金

日本山岳遺産基金（東京）は本年度の日本山岳遺産に上川管内美瑛町と十勝管内新得町にまたがる美瑛富士（1888㍍）を認定した。長年、美瑛富士で環境保全活動に取り組んできた「山のトイレを考える会」（札幌）に助成金を贈る。同会は来年2月に東京都で開かれる「日本山岳遺産サミット」で、これまでの取り組みを報告する。

基金は、登山専門誌を発行する「山と渓谷社」（東京）が2010年に設立した。豊かな自然を保った山岳を次世代に残すため、山と、環境保全や安全啓発などに努める団体を併せて支援している。これまで夕張岳（夕張市、上川管内南富良野町）とアポイ岳（日高管内様似町）の道内2カ所を含む18カ所を遺産に認定した。本年度は美瑛富士と福岡県の嘉穂アルプスの2カ所を認定した。

山のトイレを考える会は00年に登山愛好者ら数人で発足した。美瑛富士の避難小屋へのトイレ設置を目指し、マナーガイドやトイレマップを作製・配布するなどの活動が評価された。同会の岩村和彦代表（61）は「助成金で、トイレブースの設置に関するアンケートを行いたい」と話している。

（田口谷優子）

美瑛富士の環境保全に取り組んできた「山のトイレを考える会」の岩村和彦代表

2017.8.5 北海道新聞朝刊
第3種郵便物認可
北海

住所 〒060-8711 北海道新聞生活部（郵便の宛先は住所不要です）
●電話 011・210・5605
●ファクス 011・210・5607

山 トイレの準備 入念に

11日は「山の日」。昨年から始まった新しい祝日だ。道内は「山岳の宝庫」とも呼ばれ、登山や森林浴を身近に楽しめるが、山中のトイレは少なめ。山で用を足すための準備やルールを確認してから入山しよう。（酒谷信子）

紙の持ち帰りは鉄則 密閉型の袋も

まずは、山に入る前に用を足しておくこと。道内の登山愛好家でつくる「山のトイレを考える会」によると、道内の主要な160の山のうち107の山には登山口にトイレがある。「したくなくても、先に済ませておきましょう」と同会の仲俣善雄事務局長。それ以外の小さな登山口にはないので、事前に宿などで済ませておく。

山中では、トイレがあればそれを利用する。ただし「紙は持ち帰る」のが原則だ。山中のトイレは便槽に汚物がたまると、自治体などがくみ取りを行うが、紙が混じるとポンプが詰まりやすくなる。汚物を少なくすることで、くみ取りの回数や費用を減らすこともできる。密閉式のビニール袋や、おむつ用の防臭袋を利用すると、「臭いを気にせずに、紙を持ち帰りやすい」と仲俣さん。同会の女性会員の一人は「1回ごとに必要な紙や袋をコンパクトにまとめておくと、短時間でスムーズに用を足せますよ」と助言する。

ただし、同会によると、山中にトイレがあるのは19の山にとどまっている。トイレがない場合は、携帯トイレを使う。最近は携帯トイレ用のブースの設置が増えており、道内では利尻山、旭岳、トムラウシ山南沼、ニペソツ山、アポイ岳、羅臼岳、美瑛富士の7山に設置されている。

ブース内にはいす型の便座があり、携帯トイレのシートをかぶせて使う。下山した先には回収ボックスがあることも多く、そこに入れれば、自宅まで持ち帰らずに済むので便利だ。

トイレや携帯トイレ用ブースのない山も多い。その場合は岩陰など人目に付かないところで用を足す。

ただ、携帯用トイレを忘れた場合でも、「紙は持ち帰る」こと。排せつ物は、たくさん集積しなければ「自然に分解される」（同会）。しかし、ティッシュペーパーは水に溶けにくく、トイレットペーパーは自然に分解されるものの長い時間がかかり、景観を損ねてしまう。

トイレの回数を減らそうと、水分を控えるのは禁物。特に夏は暑く、登山は運動量が多いため、熱中症になる危険もあるという。

携帯トイレは1組400円前後。山岳用品を扱う店や一部の宿泊施設で販売している。環境省北海道地方環境事務所が昨年、美瑛富士で行ったアンケートでは、登山者の63・7％が携帯トイレを持参していた。同事務所の高橋啓介統括自然保護企画官は「登山の装備品の一つとして、必ず携帯を」と話している。

山で用を足す方法

※「山のトイレを考える会」の資料と談話を基に作成

㊤美瑛富士避難小屋の裏に設けられている携帯トイレ用のブース（山のトイレを考える会提供）

㊦携帯トイレの商品例。吸水シートの入ったビニール袋（左）に排せつして口をしばり、密封型のパック（右）に入れる

2018.7.11 朝日朝刊

朝日新聞

第3種郵便物認可

携帯トイレ 持って登って

民間団体・自治体・国が連携し「普及宣言」

大雪山 汚染対策で

大雪山への登山者へ携帯トイレをもっと利用してもらおうと、10日、登山団体や環境省、地元自治体らが連携し、「携帯トイレ普及宣言」を発表した。大雪山にはトイレのない避難小屋や野営地があり、環境汚染などが問題になっている。

携帯トイレ普及宣言を読み上げる佐藤芳治・上川町長＝上川町

美瑛富士避難小屋に設置された、携帯トイレブースのテント＝6月24日、美瑛町

普及宣言は、登山者への携帯トイレ利用の呼びかけや、快く使ってもらえる環境づくりをうたう。具体的には①避難小屋や野営地への携帯トイレ用のブース設置②使用済みを回収するボックスの登山口への設置と、管理体制の維持・強化③ネットやガイド事業者らを通して登山者への呼びかけ、などに取り組む。

普及宣言をしたのは、山のトイレを考える会など民間18団体と、環境省や道、地元自治体でつくる大雪山国立公園連絡協議会。環境省上川自然保護官事務所などによると、昨年の入山者は推計で7万～9万人。しかし、常設トイレがあるのは黒岳など5カ所だけだ。

トイレがない美瑛富士（1888メートル）の美瑛富士避難小屋や、トムラウシ山（2141メートル）の南沼野営地では、周辺に用を足した跡が点在、ティッシュも散乱したり、用を足す登山者が登山道以外に踏み入り、植生を破壊したりしている、という。

南沼野営地には道が2002年、携帯トイレ専用の木製ブースを一つ設置。美瑛富士避難小屋には、環境省が15年からテントを使った夏だけの仮設専用ブースを設置している。携帯トイレの持参率は向上傾向にあるというが、昨年の調査では、美瑛富士避難小屋での持参率は62％だった。トムラウシでは84％が持参したが、実際に使ったのは54％にとどまり、増設を求める回答が49％あった。

上川自然保護官事務所の桝厚生・首席自然保護官は「山岳団体と行政が連携した今回の宣言で、携帯トイレを登山口で買える、山で使える、登山口で回収してもらえる、という流れが、一連のものとして整う」と話す。美瑛富士では常設トイレブースの設置が、トムラウシでは増設がそれぞれ検討されている、という。

（本田大次郎）

COLUMN

大雪山国立公園 山のトイレを考える

1市9町というエリアに広がる大雪山国立公園。登山者の誰もに関係がある山のトイレ問題への取り組みを紹介する。

黒尾めぐみ（本誌）＝構成・文　山のトイレを考える会＝写真提供

日本の国立公園で最も広大な面積を誇る、北海道の大雪（だいせつ）山国立公園。道内最高峰の旭（あさひ）岳を擁する大雪火山群をはじめとする山岳地帯である。1934年の制定以降、大自然に触れることのできる場として、多くの観光客や登山者でにぎわってきた。その一方で懸念事項になっているのはトイレ問題だ。

90年代の中高年登山ブームによって、大雪山などの有名山岳地へ登山者が集中。トイレ設備が整っていないエリアも多く、トイレ紙の散乱、し尿による水質・土壌の汚染、登山道を外れた場所で用を足すための踏み込みで裸地が拡大するなど、数々の問題が顕在化したのである。

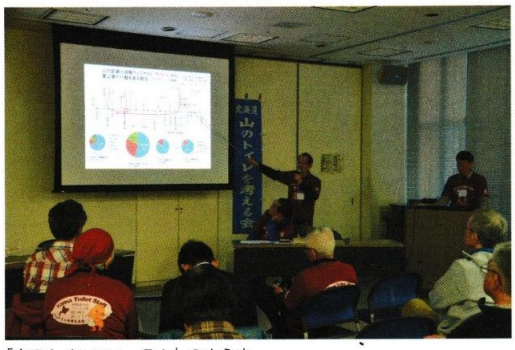
美瑛富士避難小屋周辺に散乱する、トイレ紙の回収活動

こうした山のトイレ問題を受け、山岳環境の改善をめざして活動する団体がある。札幌市に事務局を置く「山のトイレを考える会」だ。2000年の設立から、清掃登山や登山口でのトイレマナーの呼びかけ活動、意見交換や課題の共有の場としての「山のトイレフォーラム」を開催してきた。

北海道の山岳地帯のなかでも特に深刻なトイレ問題を抱えるのが、トムラウシ南沼野営地と美瑛（びえい）富士避難小屋。会では過去に、深刻な状況の場所へのトイレ設置を要請する署名を環境省に提出。しかし、トイレ1棟を建てるための費用や維持管理がネックとなり、断念。14年、登山者へ携帯トイレを周知し適切に使用してもらって環境改善をめざす方向へ舵を切ることとなった。

そして18年7月10日、環境省、北海道、周辺の1市9町で構成される大雪山国立公園連絡協議会と会などの山岳関係18団体から「大雪山国立公園携帯トイレ普及宣言」が発表された。この宣言では、国立公園内で適切に携帯トイレを使用することのほか、登山者が携帯トイレを使いやすいようブースや回収ボックスの設置を進めること、携帯トイレの普及への協力者を増やすことなどが盛り込まれている。

「山のトイレを考える会」事務局長の仲俣善雄さんは「携帯トイレを使う人も回収する人も気持ちのよい仕組みを構築できるよう、今後も取り組んでいきたい」と話す。登山者の誰にとっても他人事ではない山のトイレ問題。それぞれが考えていく必要があるだろう。



「山のトイレフォーラム」のようす

環境省設置の美瑛富士避難小屋のテント型携帯トイレブース。維持管理は、道内の山岳9団体が行なっている

決定版！日本登山ルート100選

山のトイレを考える会

山岳環境の改善をめざして、登山者や山岳ガイド、研究者などの有志が集まり2000年設立。10人の事務局運営員と、132人の個人会員、民間会社、山岳会など14の団体会員からなる。2016年度の日本山岳遺産認定団体に認定。

山と渓谷 2018年8月号

北海道新聞 朝刊
9年（令和元年）6月25日（火曜日） 2019年 北

セコマ、携帯トイレ販売

大雪山麓4町の4店で

コンビニエンスストア「セイコーマート」を運営するセコマ（札幌）は24日、大雪山系への登山口のある上川、十勝両管内4町の4店で携帯トイレの販売を始めた。環境省や両管内10市町などでつくる大雪山国立公園連絡協議会のオリジナル商品で、登山客への普及活動に一役買う。

大雪山系では近年、トイレのない避難小屋や野営指定地で、し尿や汚れた紙の散乱が問題になっている。協議会は2017年度、登山者に携帯トイレ持参を促すため、吸水シート入りで密閉して持ち運べるオリジナル携帯トイレを製作し、18年度からロープウエー乗り場や宿泊施設などで販売している。

この活動にセコマが「大雪山系の景観保持に役立ちたい」（広報部）と協力。4町で登山客の利用の多い東川店（東川町）、層雲峡店（上川町）、上士幌店（上士幌町）、屈足店（新得町）の4店で、1個（1回分）500円で販売する。

環境省上川自然保護官事務所の桝厚生（ますとうせい）首席自然保護官は「携帯トイレは登山者の必携アイテムです」と呼び掛けている。（山村晋）

セイコーマート4店で販売が始まったオリジナル携帯トイレ＝セイコーマート東川店

道新 社説 2013.9.2

山のトイレ

「携帯」の持参を習慣に

中高年や若い女性を中心に登山ブームが高まる中で、し尿による山の環境悪化が急速に進行している。

高山植物に影響を与えるばかりか、水源を汚染する恐れもあり、もはや放置できない深刻な状況にある。

山頂や避難小屋への常設トイレの設置はもとより、登山者一人一人が携帯トイレを持参する習慣を身につけなければならない。

道内には登山愛好者らが組織した「山のトイレを考える会」がある。この会が主要な160の山を調べたところ、登山口にトイレが設置されているのは半数で、登山ルートの途中にあるのはわずか1割だった。

トイレの普及がこれほどお粗末な原因は、設置や維持管理に誰が責任を負うのかが、明確に規定されてこなかったことにある。

このため、設置が遅々として進まず、トイレができても山岳会などがボランティアで維持を担ってきた。こうしたあいまいな体制は早急に解消する必要がある。

まず、長期的な視点に立ち、設置から維持管理に至る役割分担の枠組みをつくらねばならない。山岳団体の高齢化や自治体財政の悪化などを考えると先送りはできない。

この問題で最も問われるのは、利用者のモラルだ。

トイレの維持管理に充てられる協力金さえ払わない登山者を見逃すわけにはいかない。

山岳地帯に設置されたトイレの維持には予想以上のコストと労力がかかる。登山者はこの現実を真剣に受け止め、応分の負担をすべきだ。

登山者には、たとえ常設トイレがある山に入山する場合でも携帯トイレの携行を求めたい。1個数百円と安価なうえ、軽量でかさばらない。しかも、この携帯トイレの普及は利尻山で先駆的に取り組まれてきた。

利尻町と利尻富士町の両自治体と連絡協議会が2000年から6年間、無料で配布したことで少しずつ周知されるようになったという。

その後、宿泊施設や商店で販売を進めた結果、12年には登山者の約半数が島内で購入するようになった。この動きを後押ししたい。

携帯トイレの普及にはトイレブースや下山先への使用済み回収ボックスの設置も欠かせない。自治体が整備に乗り出すことが肝要だ。

これから秋の紅葉シーズンを迎え、登山者が増える。「考える会」は、常設トイレやブースがどこにあるかを記載した地図を独自に作り、無料で提供している。

入山前には必ず情報を確認し、携帯トイレを備えて出発する。こんな基本的な心掛けが、貴重な自然を守ることにつながる。

2013.9.2

朝日新聞 2019、9、26

携帯トイレブース 新増設

大雪山2カ所

国・道 登山者し尿問題 改善へ

大雪山への登山者に、携帯トイレをもっと利用してもらおうと、今夏、2カ所に携帯トイレの専用ブースが新増設された。関係者は、避難小屋や野営地周辺に、し尿が散乱する状況の改善を期待している。

美瑛富士避難小屋（写真右）に新設された携帯トイレブース＝環境省提供

ブースには、持参した携帯トイレを取り付ける簡易椅子が置かれている。新設されたのは、美瑛富士（1888㍍）の避難小屋で、8月に環境省が設置。増設はトムラウシ山（2141㍍）の南沼野営指定地で、地元の新得山岳会が約200㌔の資材の荷揚げに協力するなどし、道が7月に設置した。南沼は2ブース体制となった。

右 美瑛富士避難小屋の携帯トイレブースの内部。椅子に携帯トイレを取り付け、使用する＝環境省提供
左 トムラウシ山の南沼野営指定地に増設された携帯トイレブース＝新得山岳会提供

大雪山では、常設トイレのない宿泊地を中心に、し尿問題が深刻化しており、登山者が用を足すために登山道を外れ、植生が踏み荒らされたり、トイレットペーパーが散乱したりしてきた。美瑛富士では、トイレ設置を求める署名活動がおき、2015年からテント型の簡易ブースを設置。南沼の場合、1ブースでは需要に対応できずに「日本一汚い野営地」とも言われ、地元関係者が「南沼汚名返上プロジェクト」として携帯トイレ普及に取り組んでいた。昨年、環境省や地元自治体、山岳関係団体などが「大雪山国立公園携帯トイレ普及宣言」をし、対策強化にあたっていた。

トイレ問題に長年取り組んできた「山のトイレを考える会」の仲俣善雄・事務局長は「2カ所の新増設は大きな前進」としたうえで、携帯トイレを持参しない登山者がまだいることから、「関係団体とともに携帯トイレの普及・PRに、引き続き努めていきたい」と話している。（本田大次郎）

2017、6、18(日) 毎日新聞

一筆半歩

登山者の排せつ物や使用後のティッシュペーパーが放置され、日本一汚いと酷評されている日本百名山の大雪山系トムラウシ山（2141㍍）。道や山岳会、山のトイレを考える会（札幌）などのプロジェクトチームによる汚名返上の活動が始まったが、一筋縄ではいかないというのが取材での感想だ。

例えば、用を足すため岩陰に向かう踏み跡の「トイレ道」。道は今年度、全てのトイレ道にロープで進入禁止措置を取り、現場の植生回復策を順次進める考えだったが、チームの会合で異論が出た。

山の品格を守るために

対策が進んでいない現状での規制は、別の岩陰に向かう新たなトイレ道を増やすだけという指摘だ。

こうしたジレンマを抱えながらも、携帯トイレの利用促進を丁寧に訴え、息の長い取り組みを進めるしか事態の改善は望めない。

日本百名山は登山家で随筆家の故・深田久弥さんが登頂した山の中から選定したもので、基準の一つは「品格」とされる。トムラウシ山を抱える新得町にとって品格は地域の誇りだ。その誇りを守るために一歩踏み出したチームの頑張りを応援したい。

鈴木斉